



入院とも救急とも違う 「一般外来」ならではのエッセンスが満載

評者 | 横江正道 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院総合内科

研修医のみなさん、一般外来研修は順調に進んでいますか？

研修医になって、医学生とは異なる視点で、しかも医師免許をもって患者さんと接するなかで、「一般外来研修は難しいな…」と思っている先生が多いと思います。たしかに、入院診療は患者さんが病院にずっといてくれるので、ある程度自分のペースで進めることができますが、外来はそうはいきません。外来受診の時間は患者さんの日常生活の一部ですし、受診後、お仕事にお急ぎという患者さんもたくさんおられます。つまり、外来患者さんの診療は、限られた時間で手抜きをせずに、自分の考える最善の診療を提供しなくてはなりません。

もちろん、患者さんにとっては、一般外来研修をやっている研修医も「医師」であることに違いはありません。そ・こ・で、この『研修医・若手医師のための外来必携』がとても役に立つことになります。

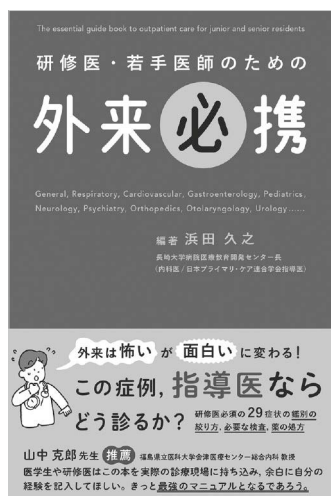
症例に始まり基本に戻る実践的アプローチ

おそらく、“ノー勉”で外来研修に臨む先生はいないでしょう!? でも、自分の想定外の主訴をもった患者さんが来ることなんて“あるある”です。救急外来の研修で腹痛や胸痛はたくさん診てきたと思いますが、場を変えて一般外来にやってくる患者さんに目を向けると、体重減少であったり、浮腫であったり、はたまた不眠であったりと、およそ救急には来ない主訴のオンパレードです。

そこで本書の編者である浜田先生は、この本にエッセンシャルを込めておられます。本書の中心をなす各論では、どの症状も最初に症例が提示されていますが、症例提示の直後に研修医と指導医の対話形式で First impression を記載しており、医師がどこに目線を置いたらよいかを大切にされています。そして、症例の特徴から考える Problem list をあげ、診断を提示し、最後には「これだけは押さえておきたい鑑別表」も示されています。なんと、そのあとに、これも研修医と指導医の対話形式による「症例の振り返り」コーナーがあり、読者はその症状を診るうえで大事なポイントをおさらいすることができます。さらに、そのコーナーのあとに、基本的知識をレビューする「もうひと頑張りの自習部屋」まで用意されています。すなわち、この1冊をちゃんとフルに勉強すれば、外来研修のエッセンスがかなり習得できるようになっているのです。

外来研修をどこから始めてよいかわからない時、本書はきっと、みなさんに気づきをもたらし、いつしか外来研修中は手から離れることがない本になることでしょう。

G



研修医・若手医師のための 外来必携

浜田久之=編

(長崎大学病院医療教育開発センター長)

定価: 4,070 (3,700 円+税)

B6 変型判・416 頁/じほう/2021

[ISBN978-4-8407-5364-7]